

2017/3/27

(日々雑感 63 今日の朝記事のオマケ)



今回のオマケの記事は、アメリカの開拓時代の話から始めたいと思います。

嘗て、アメリカが未開の地に等しかった頃、主に欧州本国でなかなか食い扶持をたたれる瀬戸際に追い込まれた人たちが、一大決心をしてアメリカ大陸に渡りました。無論一発大逆転の大望を抱いて。

元々男は「夢を喰って」生きているような生き物ですから、それはそれで良かったのですが、一緒について行った女性はそうとは限りません。元来女性は、現実的ですから、夢だけでは生きていけないことは最初から分かっていたはずです。

しかし、付いていく女性もいたわけですが。僕には理由はよく分かりません。恐らく「夢を抱いて」渡った男達にもそれはよく分からなかったのではないのでしょうか。

そのため男達は、それこそ男子に対して圧倒的に数が少なく、且つ何で付いてきてくれたかもしまいちよく分からない女性達が「怖く」もあり「希少」でもあったので、それこそ必死で周りの劣悪な環境やら外敵から、彼女らを命がけで守ったのだと思います。

正直言って「逃げられては大変」だから身を挺して彼女らを守り、外部環境や外敵と戦った。そのせいで、先住民のインディアンはかなりな迷惑を被ったりもしたわけですが。ともあれ、男達が放った合言葉は、

「レディーファースト」

まず、女性を守れ！女性を最優先にしろ！でないと、子供も出来ず、自分だけ残されて本国に帰られてしまう！

レディーファーストの元々の意味は、それだったのです。

レディー。淑女。あの環境下で、ろくすっぽバスにも入れない女性達を「レディー」と呼ぶところに男達の気持ちがつぶさに表れている気がします。しかも「ファースト」第一優先。

船が沈没しかけた際に、まず女子供を救命ボートに乗せ、男子は最後に離船する行為の始まりだったのかもしれませんが。とにかく今のように世界や日々の生活が安全・安心に満たされている環境とはほど遠い日常に於いては、上述の話の前者の部分、つまり後代に子孫を繋ぐために、まずは女子供を救わないことには先がない、との発想だったのでしょうか。

ですから「レディーファースト」というのは、洗練された紳士足るべき「男子」のカッコいいマナーなどではなく、節くれ立った指を持った、むくつけき男達がぎりぎりの瀬戸際で考え出した切羽詰まった姿の表れだったのだと推察したりもするのです。

女性達も、それを感じ取ったので「そこまでしてくださるのなら、女も男気をお見せしますわ」とばかりに、日々の生活が苦しいからと言って逃げたりせずに、開拓を共に続けたのではないのでしょうか。

そういう意味では、開拓時代は男女が対等だったのかもしれませんが。

しかし、時代は過ぎて、危険と夢に満ちた開拓時代が終わり、世の中が平和になると「レディーファースト」は名残だけ残って、中身は変質していったのではないのでしょうか。

最初の頃は、それこそ先に述べた紳士の嗜み(たしなみ)。危険や恐怖はなくなったけれど、いい習慣はいい習慣として残そうとしたとでも言いましょうか。

しかし、それがだんだんと形骸化して「男のくせに弱いものいじめをする」「セクハラ野郎と言われたら大変だ」と次第に守りの道具になっていったのではないか？取りあえず「上座に置いておけ」とか。

反面「レディーファースト」が、男達が外敵と戦いながら必死に編み出したものだという事、そうしてその返礼にかつての女性達が女の「男気」をみせたという本当の意味を紐解いたことのない後代の女性達は、この、生まれながらにしてある「レディーファースト」が、自分の身を削ってみせた女の「男気」で得たものあったことを知らないまま「あって当然、されて当然」のこととして過ごすようになったのではないのでしょうか。

そうして、そのある種形骸化したものが、その本来の謂われを伴わないまま、戦後、日本に直輸入されてしまったのではないのでしょうか。丁度明治の文明開化の時代に於いて、西洋の考え方である「個人」という概念が、本来の謂われが十分に伝わらないまま、我が国に輸入されたときのように、混乱と曲解を生み出してしまい、今日に至っているような現象。

一方、男が女を守って闘う姿を見たことがない女性達。女が男の姿に返礼として一肌脱いだことを見なかった女性達。

方や、女を守って闘った経験を持たない男達。まずは、守りに入る男達。そうして、かつての男達が取ったリスクを全く取らずに、おいしいところだけをお手軽に手に入れる術ばかりに長けてしまった男達。

「同じ穴の貉(むじな)」と言えば極論過ぎるのでしょうか？

「平時のままごと」と言ったら暴言でしょうか？

あるいは、本来の謂われを誰からも知らされずに育ってしまったお互いの不幸とでも言い直しましょうか。

世の中には「人間」というものは居ません。「人として」の「ひと」と言うものもいません。居るのは男か女か男もどきか女もどきの4種類の種族がいるだけです。「人間」や「ひと」は総称や一種の概念であって実際には存在しません。確実にその存在が確認できるのは上記の4種だけです。

それで、昨今の醸成を考える上で、かなり抽象的な「人間」や「ひと」ではなく、実体として存在する基本形の「男」と「女」に敢えて焦点を当てて、こだわって考えているのです。それ以外の種族からは「それじゃ自分らは派生形のオマケかいな！」と叱られそうですが、話を単純化するために今回は敢えてそうさせていただきます。

あと、強いて言えば、その存在が確認できるのは、親と子（産んだものと産まれたもの）、大人と子供（ひと世代先に産まれたものとひと世代後に産まれたもの）でしょうか。

もちろん以上は主に生物学的な見地の基本形からだけの選択です。上司とか部下、先輩後輩は省きます。祖父母と孫も省きます。

それにしても、上述の本来の謂われをしらされないまま今に至っている事情はあるにせよ、あまりにも手前味噌でおいしいところだけ取り過ぎた気来のある、お手軽簡単便利な手間いらず傾向の他に、安全安心安全パイの方向に、前回の話ではありませんが、振り子が思いっきり振れすぎていやしませんでしょうか？

そうして女性達はそれを謳歌し楽しみつつも、内心、心と脳髓の奥深くでは、それに飽き飽きし、物足りなさを感じ始め、そればかりを釣りえさにする、いざというときの事態に於いて「端っから守りの姿勢にはいつたり、逃げようと浮き足立っている」男子達に嫌気がさし、自分の「下」に見るようになると同時に、いい加減愛想を尽かして、何か別種のを求めはじめているのではないか。

それが男子を必要としない「自立」であったり、同じ男子でも「危険の臭い」のする男子だったりしているのではないだろうか。と思ったりもするわけです。前者が23歳以下で、後者がそれ以上の年代とか。

そんなことを感じるにつけ、男子もゲームや貯金通帳や名刺の肩書き以外に、鉄兜をかぶって鉄砲を持てとは言いませんが、せめて女子を守って何かと戦い、見方を改めた女子から「男気」を引き出すような、それこそ男の「男気」を見せるようなことをされてはどうでしょうかね？と思ったりもするわけです。

ま、女房子供に「三行半（みくだりはん）」をつきつけられた僕の言うところではないのかもしれませんが。

しかし、そういう「ろくでもないヤツ」が言うことが当たっていたりする場合もあったりするかな？とも思ったりもします。そんな風にいるいろいろあるのが世の中のおもしろいところかなと思ったりもします。

いろいろあって摩訶不思議、要するの一寸先が闇で「訳の分からんのが世の中や！」と思えばいいのかな？ともまた、独りごちたりもしております。

どうも「も」が多くて済みませんでした。癖なもので。